

## 〈第2章 熊楠と羽山兄弟—intimateな関係—〉

外国にあった日も熊野におった夜も、かの死に失せたる二人のことを片時忘れず、自分の亡父母とこの二人の姿が昼も夜も身を離れず見える。言語を發せざれど、いわゆる以心伝心でいろいろのことを暗示す。その通りの処へ往って見ると、大抵その通りの珍物を發見す。それを頼みに五、六年幽邃極まる山谷の間に僑居せり。これはいわゆる潜在識が四境のさびしきままに自在に活動して、あるいは逆行せる文字となり、あるいは物象を現じなどして、思いもうけぬ發見をなす。

[1931年8月20日付岩田準一宛書簡] (『全集9』p.25)

## 第1節、羽山兄弟の夢で始まり、羽山兄弟の夢で終わる日記

熊楠は青年期から晩年に至るまで、日記を書き続けた。淡々とした日々の記録の中でも、夢の記述は精彩を帯び、その数も膨大である。

熊楠の日記における夢の記述は、羽山兄弟に始まり、羽山兄弟に終わる。

1888年6月16日[土] 晴

午後大坪に氷酥<sup>クリーム</sup>おごる。夜大坪と中川不在中えおしかけ飲む。三好と岡野方にをしこみす。

来信 Scott Stamp Co. スタンプ百余枚、小倉松夫ハンケチ一枚

### MEMORANDA.

此周間、羽山蕃次郎氏を夢ること三夜。

清原、谷の手紙の事、Mysteries of Life, Death & Futurity.

(『日記1』 p.160) (傍線—唐澤)

熊楠は、上記日記において、一週間で羽山蕃次郎のことを三回も夢に見たと述べている。これが、熊楠がおそらく日記において夢（本研究では「睡眠中に見る夢」のみを対象とする）を語った初めである。

この頃、熊楠は在米中で、アナバー（Ann Arbor ミシガン州東南部）とランシング（Lansing ミシガン州インガム郡）を行ったり来たりしている。そしてアナバーでは、ミシガン大学の日本人留学生たちとしばしば交遊している（因みに、熊楠は同大学には入学していない）。この頃の熊楠は、切手収集などにも夢中になっていたようだ。また、『ポピュラー・サイエンス・マンスリー *Popular Science Monthly*』をしばしば購読し、いわゆる近代科学に傾倒している姿も見られる。この年（1888年）の日記の巻末には「Scientific Books」と題して、131冊の科学に関する書目が挙げられている。

熊楠は、上記日記以前の1885年から晩年に至るまではほぼ毎日、日記を記している。その中で、自身の夢を語ったのは、この1888年6月16日の日記が初めてである。ここから、これまでには見られなかった熊楠の日記における夢の記述は、怒濤の如く始まるのである。

特に、晩年の日記は「夢日記」の様相を呈している。

1941年11月30日〔日〕

〔天気〕 快 〔寒暖〕 朝寒 それよりおひおひ殆んど暑 三時頃より 夜により冷風吹出す、

朝三時過頃？羽山繁太郎方に多く老兵如き者集まり賑はふ 野尻貞一氏及び故森栗菊

松氏もありと夢む それより久しく眠らず臥し居り 八時に起く、

朝九時鳴海政■氏来り病態花の水仙一本くれる

十一時五十分樫山氏二女持参の馳走持参<sup>〔ママ〕</sup> 予南の椽にて面会 田中氏持来れるサンゴソウ鉢栽持ち帰り貰ふ

〔発信〕 田中敬忠 状一 小畔四郎 ハー 東京 上松蓊 ハー 平沼大三郎 状一

〔受信〕 朝八時四五分着 田中敬忠 ハー 二十八日午後十時出 安藤柑四五十入箱五箱作らせ送るへしと

【新聞広告切抜】『註釈大六法全書 昭和十七年版』（法文社）

【書き込み】「昭和十六年十一月二十九日大毎」

（未刊行日記・東京南方熊楠翻字の会翻刻参照）（【 】内、傍線—唐澤）

そして、これが熊楠の日記における夢に関する最後の記述である。ここで熊楠は、羽山繁太郎に関する夢を見ている。熊楠はこの日記の約一ヵ月後、12月29日に亡くなっている。いわば、死の直前期の日記であった。

この「始め」と「終わり」の間にも、羽山兄弟に関する夢の記述は多く出てくる。筆者が調べたところでは、様々な事柄に関する夢の中でも、羽山兄弟に関する夢が特に、群を抜いて多いことが明らかになっている。刊行されている『日記1～4』を見るだけでも、約15の羽山兄弟に関する夢がある（親・兄弟・家族でもない人物〔故人〕をこれ程、また晩年にも夢に見ることは、やはり稀だと思われる）。

熊楠が夢を記録し続けた理由は、まず、物的要因と心的要因がいかに影響し合っただけで夢という現象が生じるのか、そして「物」と「心」が関係し合う場でもある「事」とは何かを明らかにするためであった（熊楠はそれを「事の学」と名付けている）。それは人間の思考

パターン、あるいは想像の因果関係を明らかにするものでもあった（第3章参照）。次に、いわゆる「やりあて」（熊楠の造語：偶然の域を超えた発明や発見、的中）を実証するためでもあった（第4章参照）。しかし、もう一つここで理由を加えねばならない。失われた（夭逝した）羽山兄弟という「片割れ」を何とかして求めるため、という理由である。もう二度と一つになれない「片割れ」は、夢の中で熊楠を補償してくれていたのだ。

## 第2節、羽山兄弟とは—アニマの投影—

これより四十四年前（今年只今より四十六年前）、小生東京にありしがふらふら病いとなり、和歌山へ帰り、保養のため父の生家が日高郡にあり、その親屬またこの郡に散在するをもってそこここと遍歴せんと日高郡に来たりし。その時この北塩屋に高名の医師羽山氏なる豪家あり。その家に当時五男あり、その長男は繁太郎、二男は蕃次郎という。これは御存知通り、「筑波山は山しげ山繁れど、思ひ入るにはさはらざりけり」という歌により、苗字のは山に因みて付けたる名と察す。その宅の近所の小丘に熊野九十九王子の一なる塩屋王子の社あり。『熊野御幸記』にも載せたる旧社にて、古く俗に美人王子と号す。それゆえか、この家の五子、取り分け長男と次男は属魂の美人なり。

[1931年8月20日付岩田準一宛書簡]（『全集9』p.22）

羽山繁太郎・蕃次郎という兄弟<sup>1)</sup>について、我々は熊楠の書簡や日記などから知ることができる。熊楠は、東京予備門を「疾を脳漿に感ずるをもって」退学し、和歌山へ帰郷した時、この二人の「美少年」に出会った。熊楠によると二人は名家・医家の生まれであり、また「属魂の美人」であつたらしい。羽山家の近所には、熊野九十九王子の一つである塩屋王子があった。これは古くから「美人王子」とも呼ばれていたという。

兄・繁太郎は大阪医学校、弟・蕃次郎は東大医科大学に優秀な成績で入学した。しかし

1) 熊楠は羽山繁太郎・蕃次郎兄弟について、他にもあらゆるところで述べている。例えば、小生は日常不断令閨の二兄を夢に見るのみならず、日中にても眼前に見ること多く、全く念頭を離れぬゆえ、いつか参上せんと思ひおりしも……（以下略）

[1929年3月13日付山田栄太郎宛書簡]（『別巻1』p.322）  
など、熊楠にとって羽山兄弟は終世忘れることができない大きな存在だった。

二人とも結核を病み、余儀なく中退し、その後すぐ夭折した。熊楠が海外へ遊学中のことであった（繁太郎 1866～1888 年・享年 22 歳、蕃次郎 1871～1896 年・享年 25 歳）。因みに、三男・滋三郎、五男・周五郎、六男・茂樹も、のち同じ病に倒れている）。それは、あまりにも早い死であった。

外国にあった日も熊野におった夜も、かの死に失せたる二人のことを片時忘れず、自分の亡父母とこの二人の姿が昼も夜も身を離れず見える。言語を発せざれど、いわゆる以心伝心でいろいろのことを暗示す。その通りの処へ往って見ると、大抵その通りの珍物を発見す。それを頼みに五、六年幽邃極まる山谷の間に僑居せり。これはいわゆる潜在識が四境のさびしきままに自在に活動して、あるいは逆行せる文字となり、あるいは物象を現じなどして、思いもうけぬ発見をなす。

[1931 年 8 月 20 日付岩田準一宛書簡] (『全集 9』 p.25) (傍線—唐澤)

終世、この二人の兄弟の姿は、熊楠の脳裏から離れることはなかった。二人は常に離れず熊楠と共にあった。二人の「幽霊」が暗示した場所に行くと、大抵「珍物」（珍しい生物や新種の生物）を発見したという。だが、筆者は熊楠が残している日記<sup>2)</sup>を詳細に調べたが、故・羽山兄弟が夢あるいは「幽霊」として熊楠の前に現出し、「珍物」の在り処を示すというような記述は見当たらなかった。しかし、だからと言ってこの「故・羽山兄弟による啓示」が、熊楠による全くの作り話だったとは言えない。二人のことは「片時忘れ」なかったのだから、「珍物」を思いがけず発見したときも、二人は熊楠と共にあったはずである。熊楠は、夢やふとしたひらめきによって、珍しい生物などを多く発見（やりあて）している。この思わぬ発見への感謝は、いつも熊楠と共にあり、見守ってくれている故・羽山兄弟に向けられて然るべきだったのではないだろうか。また、これらがたとえ熊楠の創作話であったとしても、熊楠がこのように羽山兄弟をいわば神聖化して述べる背景・根底

<sup>2)</sup> 熊楠の日記には、日中の出来事のみならず、夢や「幻覚」などについても多く記録されている。筆者は、2011 年 11 月現在翻刻・刊行済みの『南方熊楠日記 1～4』(八坂書房 1987～1989)、「南方熊楠日記—1919(大正 8 年)」(『熊楠研究 6～8 号』所収、南方熊楠資料研究会編 2004～2006)及び未刊行分の 1911～1918 年、1919～1925 年、1941 年の日記(南方熊楠顕彰会、南方熊楠顕彰館所蔵)を対象に調べたが、「羽山兄弟の啓示」による発見についての記録を見つけることはできなかった。しかし、今後翻刻・刊行されるであろう残りの日記の中に、そのような記録がある可能性は十分にある。

を探ることは、南方熊楠という人物をより深く知る上で非常に重要なことである。

熊楠は、「珍物」の発見などを「偶然」の一言で片づけられるような人間ではなかった。常に、何事においても、「因果」を考える人間であった。そうした場合、たて続けに起こる「珍物」の発見の理由をどう考えれば良いのか。古今東西の学問を吸収した熊楠でさえ、その答えは容易に得ることはできなかった。——結局、夢あるいは「幽霊」という、当時（今も）はっきり分かっていない現象として考えるしかなかった。熊楠にとってそれはいわば「苦肉の策」であったのかもしれない。しかし、熊楠はこの夢や「幽霊」といった現象を、必ず明らかにしようと、生涯考察を続けたのである。

熊楠と、（死してなお）生涯常に共にあった羽山兄弟は、熊楠にとって、いわば彼自身の「影」とも言える存在であった。そしてそれは熊楠にとって常に見出されるべき対象であった。また何とかして具現化すべき対象でもあった。例えば、実際の人間にその「影」を投影することで、熊楠は自身の安定をはかろうとしていた。熊楠は羽山兄弟の「影」を追っていた。というより、むしろ自分自身の「影」（片割れ・純粋な反対・アニマ）を求めていたと言える。

我々は、羽山兄弟について、熊楠による記述とわずかに残された写真でのみ知ることができる。繁太郎・蕃次郎共に、病弱な美少年、品行方正、大人しい青年といった印象である。写真で見る羽山兄弟の面持ちは、丸みを帯びた面長の輪郭に小さな口元をしており、極めて女性的である。熊楠も「癩癩<sup>てんかん</sup>」という病を患っていたとはいえ、その他は羽山兄弟のイメージとはまるで正反対のようである。熊楠は決して美少年とは言えない。前歯の何本かは若い頃に抜いてしまい（抜けてしまい）、無かったという。「南方若翁」というニックネームをつけられる程であった。また野山を駆け廻る野生児であり、行動は大胆で、性格は激高型であった。このような特徴は、突然のキューバ採集旅行や、大英博物館での暴力事件などといったことから分かる。また、青年期には非常に科学的・論理的思考を重視していた。しかし、これらは彼の一面にすぎない。まさに「ペルソナ」である。このような熊楠像は、時に熊楠自身が大げさに語ることで、時に周りの人々がそれを面白おかしく取り上げることで、さらに大きく膨らんでいった面がある。

実際の熊楠は、非常に内気で、実に繊細な神経の持ち主であった。特に、初対面の人に

会うときは極度に緊張していたようだ。柳田国男との奇妙な対面<sup>3)</sup>(熊楠は、二日酔いで布団から出ずに柳田と話をしたという)然りである。大勢の前で話をすることはさらに苦手であった。國學院大学での講演(演壇に立ったものの、話はせず「百面相」をしたという。この「百面相」は「歪顔発作か眼瞼痙攣」ではなかったかとする研究者もいる<sup>4)</sup>)然りである。柳田との対面の時も、國學院大学での講演の時も、熊楠は事前に緊張をほぐすために、酒を大量に飲んでいる。酒を飲まない熊楠は非常に大人しかったと言われている。また熊楠は、研究中に周りが騒がしいと、しばしば怒っている。周りの物音に非常に敏感だったようだ。熊楠は「繊細な」神経の持ち主だったのだ。それは、彼が残した膨大な量の綿密な植物等の彩画を見ても伝わってくるものである。

このような熊楠像は、しばしば「本当の熊楠は……」・「実際の熊楠は……」という接頭語付きで語られることが多い。「本当の熊楠」・「実際の熊楠」とは、つまり「表面上の熊楠ではなく、裏面(あるいは深層)の熊楠」ということであろう。笠井清は、熊楠が持つ男性性と女性性について以下のように的確に述べている。

筆者はこれまで熊楠のむこう見ずなほど勇敢だった男性的な強気と奔放についてしてしたが、実は彼の性格にはそれとは相矛盾するやさしい女性的な弱気も内在していたのであって、彼は内心両親に対して何らの孝養もなし得ず、多年の外遊も十分な成果をあげ得なかったことを恥じており……(以下略)

[笠井 1967:173] (傍線—唐澤)

笠井は、熊楠には「女性的な面」が内在していたと述べている。男性の、表面上(ある

<sup>3)</sup> 笠井は、熊楠と柳田との対面を以下のように述べている。

……柳田がひとりで別れの挨拶に行くと、熊楠はまだ寝ていて、『僕は酒を飲むと目が見えなくなるから、顔を出したって仕方がない。話さえできればいいだろう』といってかいまき掻巻の袖口をあけて、その奥から話をしたという。…(中略)…熊楠にはこうした恥ずかしがりやの一面があり、初対面の人などは正視しないで、横を向いて応答していたという程であるから、多くの来客を面会謝絶した理由の一因にも、この性癖がはずかっていたのかもしれない。

[笠井 1967:233]

<sup>4)</sup> 近藤俊文(医学博士・内科医)は以下のように病理学的分析を行っている。

大学予備門時代の同級生であった芳賀矢一が学長をしている国学院大学から、学生・職員に講演することを、中山太郎を仲介として依頼された。…(中略)…このとき困惑した熊楠は百面相を演じたのだという。…(中略)…しかし壇上で呂律がまわらないことをいって、百面相を演じたというのは、歪顔発作か眼瞼痙攣のようなものが顔面にあらわれたのが、素人目には百面相を演じているように見えたのではないか。

[近藤 1996:125-126]

いは上層)の「ペルソナ」の反対側には必ず「アニマ anima (理想の女性像)」がある(女性の場合は「アニムス animus (理想の男性像)」がある)。このような補完関係によって、一つの自己(一人の人間)たり得るのである。心理学者・河合隼雄(1928~2007年)は、「ペルソナ」と「アニマ」の関係を、簡潔に以下のように説明している。

ペルソナとアニマは相補的に働くものである。男性の場合であれば、そのペルソナは、いわゆる男らしいことが期待される。彼の外的態度は、力強く、論理的でなければならない。しかし彼の内的な態度は、これとまったく相補的であって、弱弱しく、非論理的である。実際、われわれは非常に男性的な強い男が、内的には著しい弱さをもっていることを知ることがよくある。

[河合 1967 : 197]

「大胆な行動」・「論理的思考」・「強気な態度」などは、熊楠の「ペルソナ」であって、深層には、それらとは全く正反対の「大人しく」、「恥ずかしがり屋」で「繊細な」熊楠がいた。それらは熊楠の「アニマ」であったと言える。

「アニマ」は外部の対象へ投影される。無意識の層にある「アニマ」を外部へ投影することで、目に見える形で具現化するのだ。外なる他者へと向かうエネルギーは、自己の内なる他者によって可能になると言える。人は「ペルソナ」だけで生きてはいない。必ず、それと相補性を持つ「アニマ」あるいは女性の場合、「アニムス」を持っている。そしてそれらを何らかの形で具現化し、意識し、取り込むことで「完結したもの」たらんとする。人と人が強く惹かれあう背景・根底には必ずこのような関係がある。

熊楠の「アニマ」は羽山兄弟が亡くなるまで、彼らに投影されていた。像(イメージ)としてのアニマと実在する羽山兄弟は、熊楠にとって完全に一致する程のものであった。だからこそ、彼は羽山兄弟に特別に惹かれたのではないだろうか。羽山兄弟の存在こそ、まさに熊楠の「ペルソナ」を補完し安定させてくれる「アニマ」だったのである。

### 第3節、「intimate」な関係—深友としての羽山兄弟—



以下は、熊楠の日記からの抜粋である。

1886年4月20日[水] 晴

朝入浴。尾崎の上総氏夫妻にあふ。宿を吉田屋に転ず。

Hayama S. is my [以下欠文]

(『日記1』 p.70)

1886年4月29日[木] 曇

終日在寓。一昨日より右頬痛漸次癒るに似たり。

[寄書] Mr. MINAKATA is my intimate friend. S. H.

Worman's Complete German Grammer. 独逸文法大全 二円二十銭 博  
聞社

(『日記1』 p.70) (傍線—唐澤)

1886年4月29日の日記には「[寄書] Mr. MINAKATA is my intimate friend. S. H.」と記されている。「S. H.」とは当然、「羽山繁太郎」のイニシャルである。これは繁太郎に直接書いてもらったものである。4月20日には、熊楠自身が「Hayama S. is my」と書き、以下は文が欠如している。様々な想像が働くが、おそらく熊楠は、「intimate friend」と同じような意味合いの言葉を書こうとしたに違いない。あるいは「intimate friend」よりもっと深い意味の言葉を書こうとしていたのかもしれない。さらに言うならば、言葉で表現してしまうと、意味が「軽くなる」と考え、あえて空欄にしたのかもしれない。

——熊楠と羽山繁太郎は「intimate friends」であった。「intimate」とは「親密な」という意味であるが、肉體關係のある「親密さ」をほのめかす語である。彼らは「親しい」仲というより「深い」仲であった。「親友」というより「深友」とでも言うべきであろうか。

1886年4月27日[火] 陰

終日在寓。繁太郎君、道成寺平瓦を割き、半を贈らる。

(『日記1』 p.70) (傍線—唐澤)

これは二人の関係をまさに象徴的に表す出来事である。道成寺<sup>5)</sup>（和歌山県日高郡）の瓦を二つに割り、それぞれを分けて持つようにしたという。

しかし、飯倉照平によるとこの瓦は南方熊楠記念館に保存されているが、割った痕跡はないという<sup>6)</sup>。筆者もこの瓦を記念館で見せていただいた（2009年8月4日）。片端が多少歪な割れ方をしているものの、確かに「半分」に割ったという感じではなかった。

1886年4月16日[金] 曇

午後繁太郎君と御坊に至り、池田元太郎氏え為替二円おくり、金石等を購ふを托し、乗車し小熊村に至り、後歩して入野村に至る。<sup>たまた</sup>会ま大風雨、止宿す。  
道成寺古丸瓦一枚を得、前年ふきかえのとき工人其等三枚とり来りし一なりと云。

（『日記1』p.69）（傍線—唐澤）

瓦を半分にする11日前（4月16日）、熊楠は繁太郎と共に道成寺の瓦を一枚得ている。それは、前年葺き替えの際、工人が三枚とって来たものの内の一枚であったという。ここで得たものは「丸瓦」であった。そして注意して読み返すと、4月27日に繁太郎から贈られたものは「平瓦」の半分なのである。とすると、繁太郎から贈られた「平瓦」の半分と、記念館にある瓦は異なるものではないだろうか。記念館にある瓦は、4月16日に得た「丸瓦」ではないだろうか（そうすると、繁太郎から贈られた「平瓦」の半分が別に存在することになる）。

しかし、ここではその瓦が存在するかしないかを主たる問題とするのではなく、一枚の瓦を互いに半分に分割したという事柄を、象徴的に捉えたい。本章・第6節では、この瓦

<sup>5)</sup> 道成寺は和歌山県最古の寺と言われている。701(大宝元)年創建。この寺にまつわる話として、参拝の途中、一夜の宿を求めた僧・安珍に清姫が懸想し、恋の炎を燃やし、裏切られたと知るや大蛇となって安珍を追い、最後には道成寺の鐘の中に逃げた安珍を焼き殺した

[道成寺 HP 2009・8 閲覧]

という伝承が残っている。

<sup>6)</sup> 飯倉は道成寺の瓦について

……道成寺の古い瓦を、二つに割ってそれぞれが分けて持つことにしたと日記にあるが、いま南方熊楠記念館にある瓦には割った痕跡がない

[飯倉 2006:45]

と述べている。

の話をも、熊楠と羽山兄弟との関係をより深く考察するための象徴として用い、図化して解説する。

互いが、一枚の「完全」な瓦の半分を持つ——それは互いの「片割れ」があつて初めて「完全」になることができることを意味する。熊楠の「アニマ」という半分は、繁太郎そのものであつた。お互い、相手がいることで「完全」になれる（心が満たされる）ことを認識していたのではないだろうか。しかし熊楠が渡米の後、二人は再び現世で出会うことはなかった。

繁太郎は結核を患っていた。熊楠が在米中の1888年11月25日、死去している。22歳という若さであつた。

繁太郎の弟・蕃次郎は、繁太郎より三つ年下であつた。日記によると、熊楠は1886年3月24日に蕃次郎に出会っている。熊楠は蕃次郎にも上京して勉強することを勧め、夏休みを終えて東京に帰る友人たちに頼んで連れて来てもらっている。

熊楠が渡米するのは1886年12月22日である。蕃次郎と熊楠は渡米までのわずかな間ではあつたが、東京でやはり「intimate」な関係を結んでいる。

1886年11月20日[土] 晴

朝津田安麿氏と俱に其兄道太郎氏を訪、米事情を聞く。午後安麿氏と其邸に之く。  
夕羽山、志賀、今井、及弟来る。夜羽山と共に寐す。

(『日記1』p.95) (傍線—唐澤)

1886年12月20日[月] 晴

午下吉田直太郎氏を訪。

中松盛雄、沼井信之助、浅井宗恵、井林広政入朝す。

夜羽山とよせえ〔番席〕之く。羽山と同褥して寝ぬ。

(『日記1』p.100) (傍線—唐澤)

ここに記されている「羽山」とは、弟・蕃次郎のことである。蕃次郎も、兄・繁太郎の後を追うように、1896年12月3日、25歳という若さで亡くなっている。熊楠が在英中の

ことであった。繁太郎・蕃次郎二人の面影は、熊楠の脳裏から終生離れることはなかった。それは彼らの早世によって、より強い思い出となった。時に美化され、時に神聖化されながら、いつまでも熊楠と共にあった。この同性愛的経験は、晩年の「浄の男道」という独特な男色論<sup>7)</sup>に大きな影響を与えたことが推測される。

熊楠は、いつも亡くなった二人の「影」——それは熊楠自身の影〔片割れ・アニマ〕でもある——を追い続けていた。羽山兄弟は熊楠自身であった。その意味で羽山兄弟は、熊楠にとって「絶対的な他者」であったと言える。この他者を失うことは熊楠自身の消失さえ意味する。他者がいなければ当然、自己は存在しえない。従って羽山兄弟の死後、熊楠は自己を保持するため、必死で他者（羽山兄弟の「代替者」）を見つけ出そうとする。「自己意識は、対象を、欲求と同じように、再び生み出すことになる [Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 216]」のである。「欲求」とは、他者を廃棄するだけではなく、対象を（再び）作り出すことでもある。——そして熊楠は、その度にその他者から跳ね返され（押し戻され）、孤独（自分は一人であること）を感じるようになる。

死後も、熊楠からこれだけ愛された羽山兄弟は幸せだったであろう。そして残された熊楠は悩み、苦しみ続けたに違いない。しかし、熊楠は羽山兄弟の「代替者」を作り出し（完全な「代替者」を作り出すことは永遠に不可能であるが）、それに働きかけることで、自己を再認することができたとも言える。つまり、この「絶対的な片割れ」の死によって、熊楠は「自己に押しもどされた意識として、自己のうちに帰り、真の自立態」[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 230]になることができたとも言える。

#### 第4節、失われた「片割れ」を求めて

以下は、ロンドン滞在時の熊楠の日記の抜粋である。

<sup>7)</sup> 「男道」というのは熊楠の造語である。熊楠は岩田準一に、男色というのはかつて風雅な言葉であったことを述べている。また佐伯順子は、熊楠の言う「浄の男道」を以下のように解釈している。

不特定多数の相手との、肉体の享楽を主眼にした交際であれば、同性間であれ異性間であれ「多姪好姪」と非難されても仕方がないが、精神的絆を確保している一対一の関係であれば、男どうし関係であっても十分に道徳にかなっている。その場合、夫婦関係と同じように、肉体関係が介在していることは何の問題にもならないし、不道徳でもありえない——これこそが、熊楠の説きたかった「浄の男道」の内実である。

[佐伯 2001: 76]

1899年7月7日[金] 晴

午後美術館に写。それよりベイスウォーターに入浴。帰途クインス・ロードの酒店（ステーションの北隣）に、去年チェルSEA・ステーション辺の酒店にありし女、羽山繁太郎によく似たるもの、予の声をきゝ知り声かくる。それよりバスにてシェパードブッシュに至り、歩してハンマースミスより帰る。

(『日記2』 p.109) (傍線—唐澤)

1899年7月25日[火]

午後美術館に写（門氏と飯田氏方にあひ、共に）。それよりハイドパークを経てクインス・ロードに至り、酒店にて別嬪、羽山繁に似たるものにあひ、四片只なげのこと。それよりアールスコートをへて帰る。

(『日記2』 p.111) (傍線—唐澤)

1899年9月18日[月]

六時三分より美術館に写。それより出、ホワイトレーに浴す。帰途、彼酒店にのむ。羽山に似たる別嬪来り手握んとす。予不答、別嬪怒り去る。帰途レオンと話す。それよりナッチングヒルに飯ひ、歩して帰る。〈[追記]これは富田氏の日記と合すに、十九日記事にして、十九日記事は二十日記事ならん。〉

(『日記2』 p.118) (傍線—唐澤)

この繁太郎に似た女性に関する記事は、これら以外にも、この時期しばしば日記に見ることができる。熊楠はロンドンにおいて、故・羽山繁太郎（熊楠の「アニマ」）を、この或る女性（バーメイドのクレンミーという人物）に投影していたのだ<sup>8)</sup>。繁太郎はもうこの世にいない。もはや二度と「intimate」な関係を結び、一つに溶け合うことはできない。もはや道成寺の瓦の「片割れ」は一生手に入れることはできない。熊楠は一生「片割れ」

<sup>8)</sup> この酒場の女性は、『ロンドン私記(在英日本公使館宛珍状)』に登場する「クレンミー嬢」だと思われる。また、1898年7月6日の日記には以下のような記述がある。

……群集中、故蕃次郎によく似たる十六斗りの子あり。

(『日記2』p.65)

このように熊楠は、繁太郎のみならず蕃次郎の「影」も他者に投影していたのである。

を失った不完全な状態で生きていかねばならなかった。しかし、熊楠は「完全性」をどうにか取り戻そうと、「片割れ」の代わりを見出そうとしていた。熊楠も、意識では羽山兄弟とまるで同じ、完璧な「片割れ」を見つけることは、実際には不可能だということは理解していた。しかし、彼の無意識はやはり「片割れ」を求め続けていた。その結果、夢という形となり、あるいは「幽霊」という形となり、熊楠の前に現われることになった。上述のように、ロンドン時代には、酒場の或る女性にその「片割れ」を投影していた。

1899年9月18日の日記には、「羽山に似たる別嬪来り手握んとす。予不答、別嬪怒り去る」とある。熊楠は繁太郎の「代替者」を作り出した。しかし、それはやはり繁太郎ではない。それに気付いた熊楠は、女性の握手を断った。熊楠は女性を跳ね返した。しかしそれは同時に、女性から熊楠が跳ね返された（押し戻された）ことを意味する。熊楠は、あくまでもこの女性に「繁太郎」を見ていた。しかし、女性は女性自身として熊楠に近寄って来た。その現実が熊楠のイメージ（アニマ）を裏切ったのだ。つまり、「やはり繁太郎ではない」という事実を熊楠に突き付けたのである。今まで遠くから見ていたこの女性が、熊楠に触れようとした瞬間、熊楠は現実に引き戻された。熊楠は、彼の「アニマ」と、今触れようとしているこの女性が、合致しないことに気付かされてしまったのである。つまり熊楠は、現実において女性を跳ね返すと同時に、女性から跳ね返されたのである。

熊楠が、亡き繁太郎として作り出した他者は、ロンドンの酒場のある女性だけではなく、それはある時、ある子供に繁太郎が「転生する」という形をとって彼の目の前に現れることになる。

1923年11月22日[木] 雨 暖 夜むせる

○自宅地にて赤きイサリアとる、

午前十一時起く、午後自邸地所得菌一種記画…（中略）…夜讀書す、二時過臥す、三時迄不眠、それより少眠して故羽山繁太郎なり、今夜つれ来りし井澗氏の子に轉生せりと知ると夢み、さむれば四時前也、それより又眠る、

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）（傍線—唐澤）

井澗氏とは、熊楠邸内の借家に住んでいた人物（教師）である。その子・満を熊楠は非

常に可愛がったという。熊楠が子供好きだったことはよく知られているが、この満はその中でも別格であった。この頃の日記には、毎日のように満の事柄が記されている。繁太郎が「幽霊」などではなく、実際に人間の子として「転生」したのであるから当然かもしれない。しかし、この満からもおそらく熊楠は、いずれ跳ね返されるはずである（満が熊楠の日記に度々登場するのは1923～1925年頃である。1926年以降の日記は、殆ど未翻刻のままではあるが、少なくとも羽山兄弟のように、熊楠が日記以外の書簡や論考などで満を取り上げることはなかった）。

これまで見てきた熊楠の同性愛志向や過剰なまでの羽山兄弟へのこだわりを、熊楠の脳の器質的（病理的）な面だけに帰すべきではない。河合は以下のように述べている。

筆者【河合】に治療を受けに来た同性愛と夢中遊行に悩むスイスのある男子の高校生が、その同性愛の対象となっている学生のことを話しているうち、「ああ、結局、彼は私です。私の心のなかでこうあって欲しい、こうあって欲しかったと思っている私の姿、それが彼なのです」と叫び出すように話したことがある。…（中略）…しかし、この異常なことを病理的な面でのみとらえずに、この行動のなかに、彼の生きることを願い、そうありたいと願っている心の働き、つまり、そのような異常な行動をとってさえ、自分の人格のなかに欠けたものを取り入れ統合しようとの試みがなされていることを読み取ることが大切であると考えられる。

【河合 1967 : 221-222】（【 】内、傍線—唐澤）

河合が述べるように、同性愛及びそれに伴う性的行為がもし「異常」であるならば、そのような「異常」な行為をしてまで自身に取り込もうとした「人格のなかに欠けたもの」とは一体何なのか、なぜ取り込もうとしたのか、その試みの背景を読み取ることが必要である。河合の患者が言う「私の姿＝彼」とは一体どういうことなのか、その意味を考えなければならない。つまり、熊楠と羽山兄弟の関係を見る際、重要なことは、熊楠の在り方や行為の意味なのである。決して脳の器質的問題だけに還元すべきではない。

## 第5節、その他、日記に見る羽山兄弟に関する夢の記述

これまで述べてきたもの以外にも、羽山繁太郎・蕃次郎兄弟に関する夢の記述は数多くある。以下に、それを年代ごとに示していく。

1889年1月11日[金] 陰

此朝、夢に中尾映、羽山蕃<sup>(次)</sup>二郎二氏相伴ひて東方より来る（東西は仮定）。予は西方より過る所で、始めは南より次に北より見る。

(『日記1』 p.190)

1889年4月24日[水] 陰

昨朝亡羽山繁<sup>(次)</sup>次郎を夢み、予、君死たるはうそなりやと問ふに答へず。今朝羽山蕃次郎子を夢む。今夜を徹していねず。

(『日記1』 p.202)

1888年（明治21年）11月25日、繁太郎が死去する。熊楠が知ったのは1889年1月7日であった。熊楠は在米中であった。ランシング農学校を退学し、ミシガン大学の日本人留学生と親しく交わっていた頃である。繁太郎の死が余程ショックだったのであろう。1889年4月24日の日記では、「君が死んだというのは嘘ではないのか。」と繁太郎に問う夢を昨朝見たと書いている。そして今朝は蕃次郎を夢に見ている。その夜、熊楠は眠ることができなかった。因みに、この夢の三日後の4月27日に、熊楠は「癲癩」を発作的に起こしている。

熊楠は1889年4月24日の日記において、繁太郎の名前を繁次郎と書き間違えている。ここには注意が必要である。熊楠は無意識のうちに書き損じたのだと思われるが、彼の内では繁太郎と蕃次郎は区別がないほどの存在であった。つまり、熊楠の中では繁太郎と蕃次郎は「二人で一人」のようなあり方をしていた。事実、書簡や論考等で、羽山兄弟を語る際（前述した1931年8月20日付岩田準一宛書簡などに見られるように）、必ず繁太郎と蕃次郎を併せて書いている。書簡と論考においては、片方のみを語ることはないのである。



1895年6月24日[月] 晴

朝木下友、羽山蕃を夢む。

(『日記1』 p.376)

1897年12月23日[木]

朝、羽山蕃とやる夢を初て見る。

(『日記2』 p.42) (傍線—唐澤)

1898年4月28日[木] 微雨

朝羽蕃、前よりやる夢みる、ぬく。

(『日記2』 p.57) (傍線—唐澤)

1899年11月14日[火] 晴

朝羽山兄弟を夢む。又長尾駿郎も。

(『日記2』 p.126)

1893年9月、熊楠は、アメリカからロンドンへ渡る。ロンドン時代にも、やはり羽山兄弟の夢を何度か見ている。特に羽山蕃次郎の夢が多い。熊楠は蕃次郎と夢の中でも「intimate」な関係を結んでいたようだ。上記で筆者が傍線で示した通り、それは非常に生々しい表現で記されている。明らかに性的関係の夢である。

蕃次郎は1896年(明治29年)12月3日に死去している。

1903年2月24日[土] 快 暖

夜津田義治を紹介して故羽山蕃次郎を聞き所に尋ると夢む。

(『日記2』 p.326)

1904年5月5日[木] 雨

暁故羽山蕃次郎を夢む。

(『日記 2』 p.433)

1904年5月27日[金] 雨

暁故羽山蕃次郎（見しときの顔に非ず、予キューバに在しとき送來りし写真の通り）と何れかえ之き、かえりに駿河台下の其頃行し西洋料理店に立よる。亭主出來りビールくれるが注文通り早く持來らず。羽山は他の店にゆき他人と話すと夢みる所に、戸あけに來り、今少しと思ふ内、浣拭みなきえ、羽山の顔のみのこり眼あく。（昨夜、西洋料理其頃食にゆきしこと思し也。）

(『日記 2』 p.440) (傍線—唐澤)

1904年8月20日[土] 晴雨しば／＼かわる

此朝故羽山蕃次郎と伝法橋南側西の方の家にあひ、牛肉食ひにゆけとすゝむるに、同人諾し出来る。予肺病人なるにこまつたこといひしと思ふ内、常楠今の宅前に來る。此前に蕃次郎同寓に伊吹山氏あり。予故佐竹巖死たる由及此人に似たる由をいふ。羽山と伊吹山、何の係なし。予竜動領事宅にて羽山の友中島滋太郎氏と初て面せしとき伊吹山氏もありし。久く忘れ居たるに、夢に中島のことは略し伊吹山を見るなり。（佐竹と伊吹山は知人なり。）

(『日記 2』 p.458) (傍線—唐澤)

1900年10月にロンドンから帰国した熊楠は、翌年1901年10月30日から1904年10月6日まで那智・勝浦で読書と採集の日々を送ることになる。これまでの羽山兄弟に関する夢の記述とは異なり、夢の状況がより詳細に書かれていることが多い。これまでの淡々とした羽山兄弟に関する夢の記述は、ここにきて急に精彩を帯びたものになっている。

例えば、1904年5月27日の日記では、熊楠は蕃次郎と共にどこかへ行き、帰りに駿河台下の西洋料理店に立ち寄る夢を見ている。蕃次郎の顔は、かつて熊楠が知っていた頃の顔ではなく、熊楠がキューバにいるとき送ってきた写真の顔であった。料理店の店主がビールを持ってきてくれた。しかし、他の注文はなかなか持ってこなかったようだ。待ち切

れなかったのだろうか、蕃次郎は他の店へ行ってしまった。そして蕃次郎は他人と話をしていた。「今少し」とは、もう少し蕃次郎と夢の中で時を過ごしたかった熊楠の切なる願いであった。しかし雨戸を開ける音と共にすべては消える。そして、蕃次郎の顔の残像のみははっきりと記憶に残り目が覚めたという。

1904年8月20日の夢では、熊楠は、蕃次郎と会って「牛肉を食いに行け」と勧めている。しかし、よくよく考えてみると蕃次郎は肺病を患っていたので、無茶なことを言ってしまったと後悔した様子が描かれている。これは蕃次郎が結核という肺病であることを知りつつも、それを認めたくない熊楠の心の表れであろうか。

1910年1月10日[月] 陰

昨朝、故羽山蕃次郎連夜来り会ふと夢む。

(『日記3』 p.331)

1906年に熊楠は、鬮鶏神社宮司の娘・田村松枝(1879～1955年)と結婚し、翌年1907年6月24日には長男・熊弥(1907～1960年)が誕生する。日記には熊弥に関する記録ばかりが書かれている。まるで「育児日記」の様相を呈している。家庭を持った熊楠であったが、精神的に決して安定した状態ではなかった。1906年8月には内務省で神社合祀の方針が示され、和歌山では12月に通牒が出されている。このいわゆる「神社合祀令」に、熊楠は猛反対する。命を賭しての反対運動であった。1910年8月には、県史への面会を求めて夏季講習会へ乱入し、18日間拘留されている。結婚・子育て・神社合祀反対運動と心休まる時がない時期だったからであろうか、この頃羽山兄弟に関する夢はあまり見えない。いや、多忙のあまり、書いていないだけかもしれない。

1913年3月22日[土] 晴

本月十八日川島友吉氏来る。予故羽山蕃次郎写真大に磨滅に近きを以て保存の為め写  
 図せんことを求めし。二枚あり、一枚予と共に十九年十一月<sup>十二</sup>とりしは大分磨滅、今一  
 つ二十四年<sup>五</sup>氏一人とりしも少々変色しあり、又此頃夢に見ることありしなり。去年末?  
 より近隣レビット宅に来寓し、立花、裁縫のけいこに之く十八斗りの女子あり、予は

今此事筆するときも見知らず、良家の子らしく毎度松枝に叮嚀に礼す。今夕松枝牛肉かひに之、帰るとき後より近<sup>ちかつき</sup>来り文枝を愛し色々<sup>はな</sup>咄す内、其兄は予と至て心易くせし、自分宅へ来られしこともあり、一度伺ひ度思ひ居たりといふ。松枝其姓をきくに塩屋の羽山也といふ。奇遇なり。又は他心通？

二月廿二日森彦太郎氏来りしときも羽山家の成行<sup>たずね</sup>を尋<sup>(謝)</sup>しに、芳記といふ人のみ存せりといふ。前年喜多幅氏に聞<sup>(謝)</sup>に、信枝といふ女子ありとのこと、西京真宗学校に学ぶと。今日はその妹か。

(『日記4』 pp.242-243) (傍線—唐澤)

1913年、熊楠は改めて羽山兄弟あるいは羽山家との「縁」を痛感せざるを得ない出来事に遭遇する。同年3月18日、熊楠は友人の画家・川島友吉(号：草堂 1880～1940年)に、蕃次郎の写真を保存の為に写図してくれと頼んでいる。この頃、蕃次郎の夢を見ることもあったという。夢に蕃次郎を見て、彼と一緒に撮った写真の劣化が何となく気になっていたのであろう。あるいは写真の劣化が前々から気になって、夢に蕃次郎を見たのかもしれない。

そして3月22日、妻・松枝が、ある女性と出会う。姓を聞くと「羽山」であった。実はこの女性は、羽山繁太郎・蕃次郎兄弟の末妹・羽山<sup>すえ</sup>季であった。熊楠はこれを「奇遇なり。又は他心通？」と述べている。「他心通」とは、いわゆる「telepathy」のことである(telepathyについては第4章・第14節で述べる)。蕃次郎の夢を見、蕃次郎の写真の劣化を気にしていたとき、ちょうど羽山季が現れたのだ。熊楠が、自分の心(願い)があゝの世の蕃次郎に通じたと感じたとしても、不思議ではない出来事であった。

1917年11月28日[水] 晴

朝方故羽山蕃次郎を夢に見る、甚だ円く肥ある也、これは此表政内艶香といふ去年死だ女、又油岩の甥の少年に肥たものあるを、夜来話せしによる。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1918年5月26日[日] 陰 午後時々微雨

朝羽山蕃次郎を夢む、死せし人と知る様で、知らぬ様也。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1916年、熊楠は中屋敷町三六番地に転居する。1917年8月24日には、自宅の柿の木から新種の粘菌 (*Minakatella longifila*) を発見している。また、1918年3月には、貴族院で「神社合祀令」の廃止が決議されている。熊楠にとっては、これまでの地道な努力が実を結び始めた時期であった。1917年11月28日に見た夢の中の蕃次郎は、丸々と肥えていた。おそらく夢の中の蕃次郎は、病でやせ細った感じはなく、元気な姿をしていたのであろう。1918年5月26日の夢は、印象深い。「死せし人と知る様で、知らぬ様也。」とは、蕃次郎の死を未だ受容できない熊楠の心の表れのようなのである。

1922年4月12日[水] 晴

○朝川根米と羽山蕃次郎と同時代なりやと亡母にきくと夢む。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1922年4月21日[金] 晴 暖

○午後一時地震、羽山蕃次郎を夢に見る、肺患者と、予夢中ながら心得居る。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

熊楠は1922年3月26日から8月15日まで、南方植物研究所の資金を集めるため上京している。上記の夢はその際見たものである。1922年4月12日の夢で、熊楠は亡母に、以前熊楠宅で女中をしていた川根米と蕃次郎は同世代であろうかと尋ねている。熊楠にとって、蕃次郎は、いつまでも少年のままだったのであろう。熊楠は若い女中と同じ年くらいの時の蕃次郎の姿しか知らない。結果、ちょうど米と同世代ではないかと勘違いをし、母に聞いたのだ。

蕃次郎は夢の中では元気な姿で現れることが多かったのであろう。しかし、続く1922年4月21日の日記では、夢の中で蕃次郎が肺病を患っていることを熊楠は、はっきりと認識していたという。つまり、蕃次郎の「肺結核」＝「死」を理解していたようだ。これ

は、以前は受容できなかった蕃次郎の死を、時と共に徐々に受け入れようとしている熊楠の心の表れかもしれない。

1941年11月7日[金] 快 やや暖

朝六時二十分に起る 其前夢に羽山繁太郎と其宅と覚しきが甚だ広きに居り宅後の山間に菌を採ると見てさむ、

(未刊行日記・東京南方熊楠翻字の会翻刻)

1941年は熊楠の晩年である。11月2日には、熊弥に『日本動物図鑑』を、11月16日には娘・文枝(1911~2000年)に『今昔物語』を、ささやかな形見として贈っている。自らの死が近いことを悟っていたようだ。死の直前期に見た夢の中の繁太郎はどのような姿をしていたのだろうか。何を話したのであろうか。

※

このように、青年期から晩年に至るまでずっと、熊楠の脳裏から羽山兄弟は離れることはなかった。熊楠は、羽山兄弟に完全に囚われていた。もはや羽山兄弟の支配下にあったとさえ言えるかもしれない。数多くの羽山兄弟の夢は、まるで熊楠に「命令」を下しているかのようである。「我々の代替者(熊楠の「アニマ」)を形成し、差し出せ」と。では、囚われていた熊楠は、まったく従属的で独自性を持たない、非自立的な存在だったのか。否、熊楠が形成した「代替者」は、熊楠をいつも跳ね返した。熊楠は跳ね返され、押し戻されることで、孤独と共に個別性を獲得していたのだ。<sup>9)</sup>

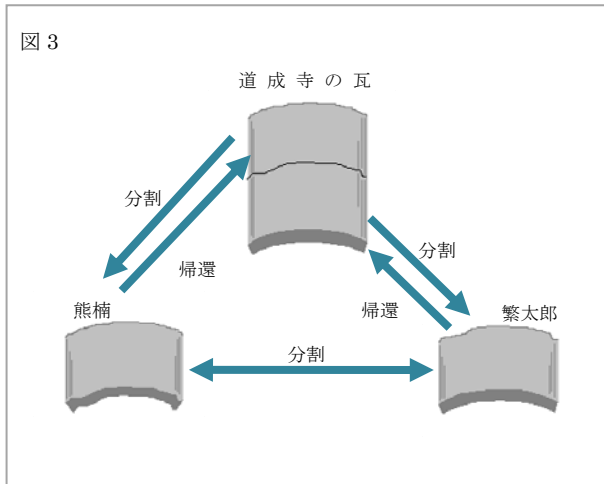
## 第6節、絶対的な片割れの喪失体験

ここまで述べてきたように、熊楠と羽山兄弟は、常に共にあった。熊楠は夢の中で羽山兄弟を現出させることで、あるいは実際に他人に羽山兄弟を投影することで自己の安定を

---

<sup>9)</sup> 独自性(個別性)を獲得することは果して良いことなのか——この問いに対する答えには留保が必要である。簡単に答えの出せる問題ではない。個別性を重視しすぎた結果、近代以降の様々な問題が起こったことは言うまでもない。しかし、少なくとも熊楠の場合、羽山兄弟の死や投影した他者からの跳ね返しによって独自性を獲得した。その結果、後世に残る偉大な業績を残すことができたとも言える。

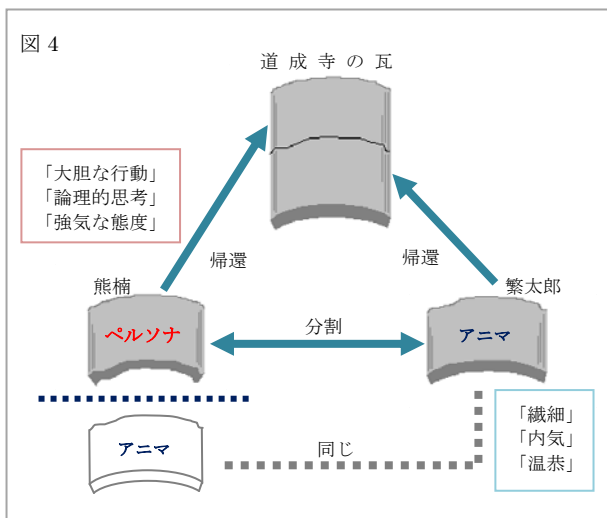
図ろうとしていた。羽山兄弟は、紛う方なく熊楠を補完してくれる「片割れ」だったのだ。それはまるで先述した道成寺の一枚の瓦の半分のようなものであった。しかし、亡くなった羽山兄弟は、熊楠が直接関わることでできない存在であった。熊楠がいることで、そして熊楠



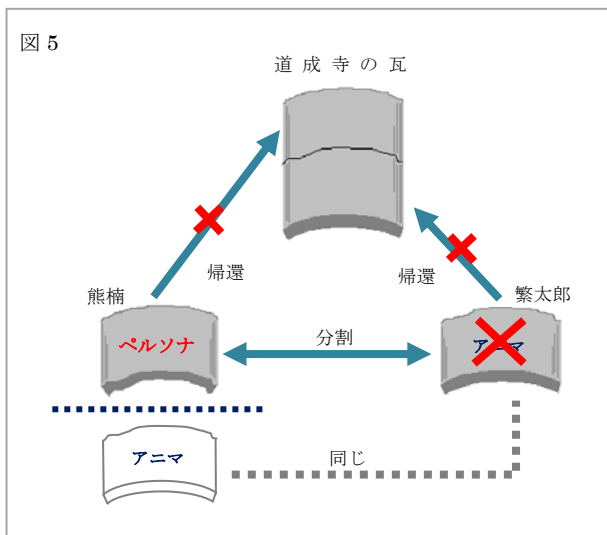
の「アニマ」が他者として見出す限りにおいて在り得る存在だった。

以下の〔図3〕から〔図8〕は、熊楠と繁太郎の関係を「道成寺の瓦」の話を基に、象徴的に図化したものである。

〔図3〕道成寺の一枚の瓦は、熊楠と繁太郎が半分ずつに分割して持っていた。もともと「一」であったものを、なぜ二つに分けるのか。それは自己の存在を保持しようとする、人間の自己保存の欲求だからとも言えるし、再び「統一」へ帰還できることを願って（憧れて）のことだとも言える（分裂がなければ統一はあり得ない。逆も然りである）。

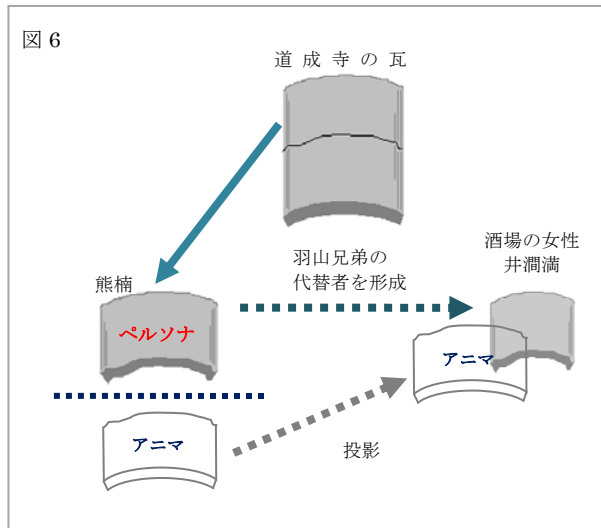


〔図4〕繁太郎が持つ半分は、熊楠の「アニマ」を象徴している。熊楠自身が持つ、自分自身の目の前にある半分は「ペルソナ」である。それは熊楠自身が（我々の多くも）認識している「表面上の」特徴である。繁太郎がいることで熊楠は「安定状態」を得ることができた。熊楠は、いつでも「一」へ帰還できると安心して安んじていた。「一」への帰還を確実なことと考えていた。

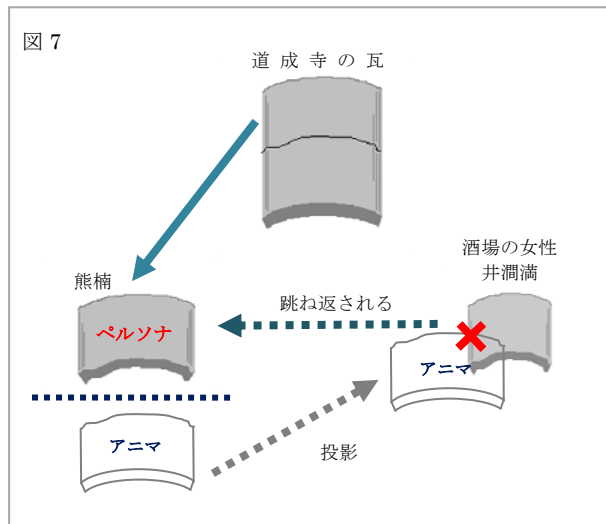


〔図5〕「ペルソナ」は「ペルソナ」だ

けでは生きてはいけない。自己の「完全性」を求めて、自らのもう半分を欲求する。元々は自分自身と一体であった、割れて半分になった、自分とは別の「片割れ」を探すのである。「ペルソナ」の別の半分は「アニマ（女性の場合はアニムス）」である。上述のように、熊楠の「アニマ」という半分は、繁太郎が持っていた。しかし繁太郎は亡くなってしまった。それは、熊楠にとって「アニマ」の投影対象を失ったことを意味する。



〔図6〕「ある他者の反対ではなく、純粹の反対」[Hegel 1807, 櫻山訳 1997: 199] (つまり、他者でありつつも自己と相補性を成す、[「独立的」といっても良い] もう一つの自分) である他者を失った自己は、自己として存在することはできない。自己を自己たらしめるのは他者によってである。熊楠が熊楠であるためには、他者が必要であった。繁太郎を失った熊楠は、その「代替者」を他者として求める。例えばそれは、熊楠がロンドンで、或る女性に「アニマ（繁太郎）」を投影していたことや、井潤満に「アニマ（繁太郎）」を投影していたことなどからも分かる。

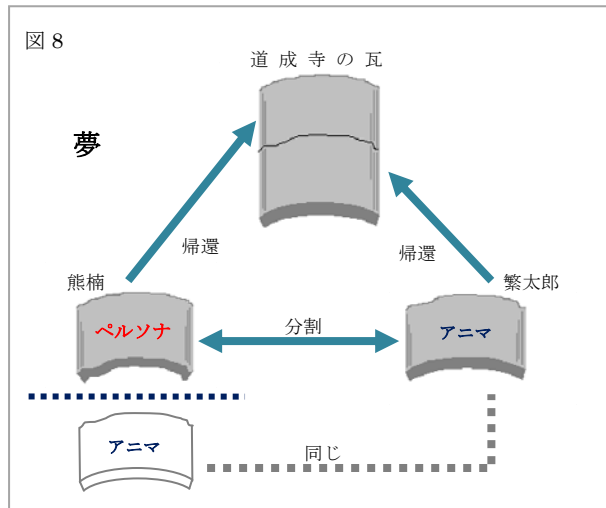


〔図7〕そして熊楠は、自分が持つ瓦の半分（ペルソナ）を、投影した相手（アニマ）と合わせてみる。しかし、どうしてもピッタリとは合致しないのだ。初めは一致

すると感じるが、結局それはやはり繁太郎ではないことに気付く。ロンドンの酒場で繁太郎に似た女性が熊楠に握手を求めてきたが、熊楠はそれを拒否し、女性を怒らせている（本章・第4節、1899年9月18日の日記参照）。これは、熊楠が、この女性はやはり繁太郎とは違うと気づいた瞬間だったのかもしれない。それに気付いた時（「代替者」から跳ね返された時）、熊楠は孤独を感じたであろう。しかしそのことによって熊楠は、「独立性」を



獲得したとも言える。同様に、羽山兄弟と「intimate」な関係を結んだ夢を見て、目覚めたときも、熊楠は孤独と同時に独立性を得たであろう。この「社会」で、人間として生きていくためには、独立せざるを得なかった。「一」に安住することはできなかった。



〔図8〕現実世界において、どれほど次から次へと「代替者」を求めても、やはり、繁太郎が持つ瓦の半分でなければ、熊楠の半分は永遠に元の完全な「一」には戻ることができなかった。もはや熊楠は、夢の中でしか「一」に戻ることはできなかったのだ。夢の中では、熊楠は求めた繁太郎を思う存分享受できた。凸と凹が合わさるように、「intimate」な関係を結ぶことができた。

熊楠にとって、それは「至福」の時であった。

しかし、それは永遠には続かない夢であるから「至福」であったとも言える。もし、その「至福」(統一)に留まってしまえば、それは「完全」であると同時に「無」を意味する。一方自己を保とうとするのであれば、「一」から分裂し、他者を見出さねばならない。熊楠は後者を選んだ。というよりも、人間であるが故に持つ、根源的な「無の不安」が、彼に後者を選ばせた。夢において、熊楠は「アニマ」と合体し「統一」へと瞬間的に帰還したが、そこで根源的な「無の不安」に襲われた。自己が完全に消えてしまうことへの「不安」、これは自己意識を持つ人間であるが故の「不安」でもある(第1章・第4節参照)。

もし熊楠が羽山兄弟の「アニマ」と完全に合体し「一」に滞留していたら(することができたならば)、そこには何が待っていたであろうか。——「神話」や「童話」においては、「アニマ」に魅せられ、それと完全に一つになった男性には、大抵悲劇的な結末が待っている。<sup>10)</sup>

<sup>10)</sup> E.ユングは、『内なる異性—アニムスとアニマー』において、物語に見られる「白鳥」や「水の精」(それらは男性に対する「アニマ」を表象している)などにまつわる事例をいくつか挙げた後、以下のように述べている。

……彼女のとりこになったものは、その男性性質を失い、ついには死にいたる。今述べた例からもわかるように、アニマにとらえられるときまって同じ運命【男性性質の喪失と死】がまっている。

[E. Jung 1955, 笠原・吉本訳 1976:112](【 】内—唐澤)

## 第7節. エネルギーの源泉

ヘーゲルはこのように述べている。

まず、自己意識は他方の自立的な実在を廃棄することによって、自分が実在であることを確信することに、向って行かねばならない。そこで次に、自己自身を廃棄することになる。というのは、この他者は自己自身だからである。

[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 220]

熊楠は、羽山兄弟を失った。つまり、熊楠の純粹の反対たる他者は「廃棄」されたのだ。このことによって熊楠は、自らが「実在であること」を手に入れたように見える。しかし実際には、この「廃棄」によって、熊楠自身も「廃棄」されることになる。なぜなら、羽山兄弟は熊楠の「アニマ・片割れ・影」であり、それは熊楠自身を構成しているものだったからである。

もはや羽山兄弟は蘇らない。こうして熊楠は「真の片割れ」の「代替者（物）」を終世探し求めなければならなくなった。しかし、その「代替者」から熊楠は跳ね返されてしまう。その「どうしようもなさ」が熊楠に実在性・独立性を与えた。

夢においては少し事情が異なる。夢において熊楠は、自身の欲求を満足させることができた。つまり、羽山兄弟を熊楠の純粹に反対なもの（片割れ）と見なし、思う存分「intimate」な関係を結び、溶け合うことができたのだ。その時、もはや熊楠（自己）も羽山兄弟（他者）も消え去り「一」になっている（夢は現実と異なり、羽山兄弟がこの世を去った後も、それを可能にする）。しかし夢はいずれ覚める<sup>11)</sup>。その時「一」は分裂する。それは熊楠に孤独を与えた。

しかし、この大きな「片割れ」を現実において失うことで、熊楠は熊楠になることができたとすることができる。羽山兄弟の夢を見た熊楠は、目覚めた後、孤独を味わったに違いない。羽山兄弟は死んでしまってこの世にはいない。そして自分（熊楠）は今、生きている。「片割れ」の「死」を思うことで、自らの「生」を痛烈に感じていたのではないだろうか。また、「片割れ」の「代替者」を探しても、やはりそこには「片割れ」はおらず、孤独

を味わった。孤独とは、対象（他者）から跳ね返され、それによって対象の存在を確信し、また自らを自らとして自覚することである。熊楠は羽山兄弟の「死」によって、他の誰でもない「南方熊楠」を初めて自覚したのではないだろうか。

「歴史に『もし』はない」——手垢のついた言葉だが、もし羽山兄弟が生きていたら、きっと熊楠は、我々の知る「南方熊楠」ではなかったであろう。熊楠のいわば「デモニッシュ」な収集・採集行為は、自身の片割れ（影・アニマ・半分）を必死に求めてのことだったのではないだろうか（因みに荒俣宏は「菌類に選ばれて—熊楠博物学の業と個性—」において、「集める」ではなく「蒐める」という字を用いている[荒俣 1989 : 167 他]。熊楠の、特に隠花植物と粘菌に対する収集・採集行為は、まさに鬼の如き執念であった）。さらに言えば、存在の「完全性」を回復するために、何としてでもそれを取り込み（introjective）たい、あるいはそれに入り込み（indwell）たいという願望の現われだったのではないだろうか。熊楠が好んで研究対象として選んだものは、曖昧で猥雑、非合理的なものばかりであった（例えば粘菌〔特に原形体〕、幽霊、カニバリズムの歴史、迷信・俗信など）。いわば「アニマ」的なものばかりであった<sup>12)</sup>。熊楠は欠落した「片割れ（アニマ）」の充足を求めていた。あるいは、粉々になった「真の片割れ」の欠片を、片っ端から収集・採集し、元の形に戻そうとしたと言えるかもしれない。

羽山兄弟が亡くなったことは、熊楠にとってあまりにも大きな喪失体験であった。しかし、その喪失が熊楠を熊楠たらしめる結果となったとすることができる。そして熊楠の驚異的な収集・採集エネルギーの背景、特に「アニマ」的なものへ向かう、超人的エネルギーの根底には、このような「絶対的な片割れ」との関係があったとすることができるのではないだろうか。

## 参考文献

- ・ 荒俣宏、「菌類に選ばれて—熊楠博物学の業と個性—」、1989（『新文芸読本 南方熊楠』、河出書房新社、1993 所収）
- ・ 飯倉照平、『南方熊楠—梟の如く黙坐しおる—』、ミネルヴァ書房、2006
- ・ 氏原寛・成田善弘編、『転移／逆転移—臨床の現場から』、人文書院、1997

- ・笠井清、『南方熊楠』、吉川弘文館、1967
- ・河合隼雄、『ユング心理学入門』、培風館、1967
- ・近藤俊文、『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』、岩波書店、1996
- ・佐伯順子、「南方熊楠の男色論—「浄と不浄」再考—」『熊楠研究 3』、南方熊楠資料研究会、2001
- ・道成寺ホームページ 2009・8 閲覧 『道成寺 Temple of legend & fine arts』、  
http://www.dojoji.com/
- ・Hegel, G. W. F. *Phänomenologie des Geistes*, 1807／邦訳：榎山欽四郎、『精神現象学(上)』、平凡社、1997
- ・松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太編、『南方熊楠を知る事典』、講談社現代新書、1993
- ・Jung, Emma, *EIN BEITRAG ZUM PROBLEM DES ANIMUS*, 1947, *DIE ANIMA ALS NATURWESEN*, 1955／邦訳：笠原嘉・吉本千鶴子、『内なる異性—アニムスとアニマー』、海鳴社、1976

11) 熊楠が、しばしば現実と夢とを混同していたことは、第1章・第3節を中心に述べた。そのような熊楠は、以下のよう  
に自身のことを「夢のような人物」と呼ぶ。

しかして今、熊公かかる夢の国におりて、夢影を尋ね、夢事を夢魂に訴えて止まず。昔時、夢の場のちよんの  
間の楽しみを思い寝のあまり、夢よりはかなき夢中の人に遇い、いきそうなところで寤めたりとて、さらにその夢た  
りしを恨む。熊公は、これ夢中夢を説くの痴人、夢のような人物なるかな。

[1892年8月初旬ごろ[推定]中松盛雄宛書簡]([『全集 7』p.130)(傍点は熊楠による)(傍線一唐澤)  
熊楠は、「夢の国」で「夢よりはかなき夢中の人(おそらくは亡くなった繁太郎)」に会い、intimate な関係を結んだ。  
しかし、完全に忘我する直前でその夢は覚めたようだ。しかし「夢中夢を説くの痴人」であった熊楠は、夢から本当に  
覚めていたのか。実は、熊楠はずっと「夢の国」に居たのかもしれない。つまり熊楠は、本当の現実世界にはおらず、  
常に現実界と「統一」とを結ぶ(あるいは両者が混在する)(中間)に居たのではないだろうか。

12) 「アニマ」とは通常、人格化されたイメージとして夢などに現れたり、実際の女性に投影されたりする。しかし時に、  
物事や物体がその役割を果たす場合もある[河合 1967:208 参照]。人格化された像や実際の女性へ投影された  
ものが「アニマ」とであるとすると、物事や物体が同じような役割を果たしている場合、それらは「アニマ」的なものと言え  
る。また、ある男性(女性)が特定の物体や女性(男性)の身体の一部に性的魅力(頭では理解できない程、強力で  
惹きつけられる力)を強く感じ、それらに特に執着する在り方が「フェティシズム Fetishism」であるが、熊楠の粘菌に  
対する在り方には、この「フェティシズム」を見てとることができる。否、熊楠の、「アニマ」的なもの(幽霊、カニバリズム  
の歴史、迷信・俗信など)に対する在り方には、全て「フェティシズム」を見出すことができる(第5章・第5節参照)。